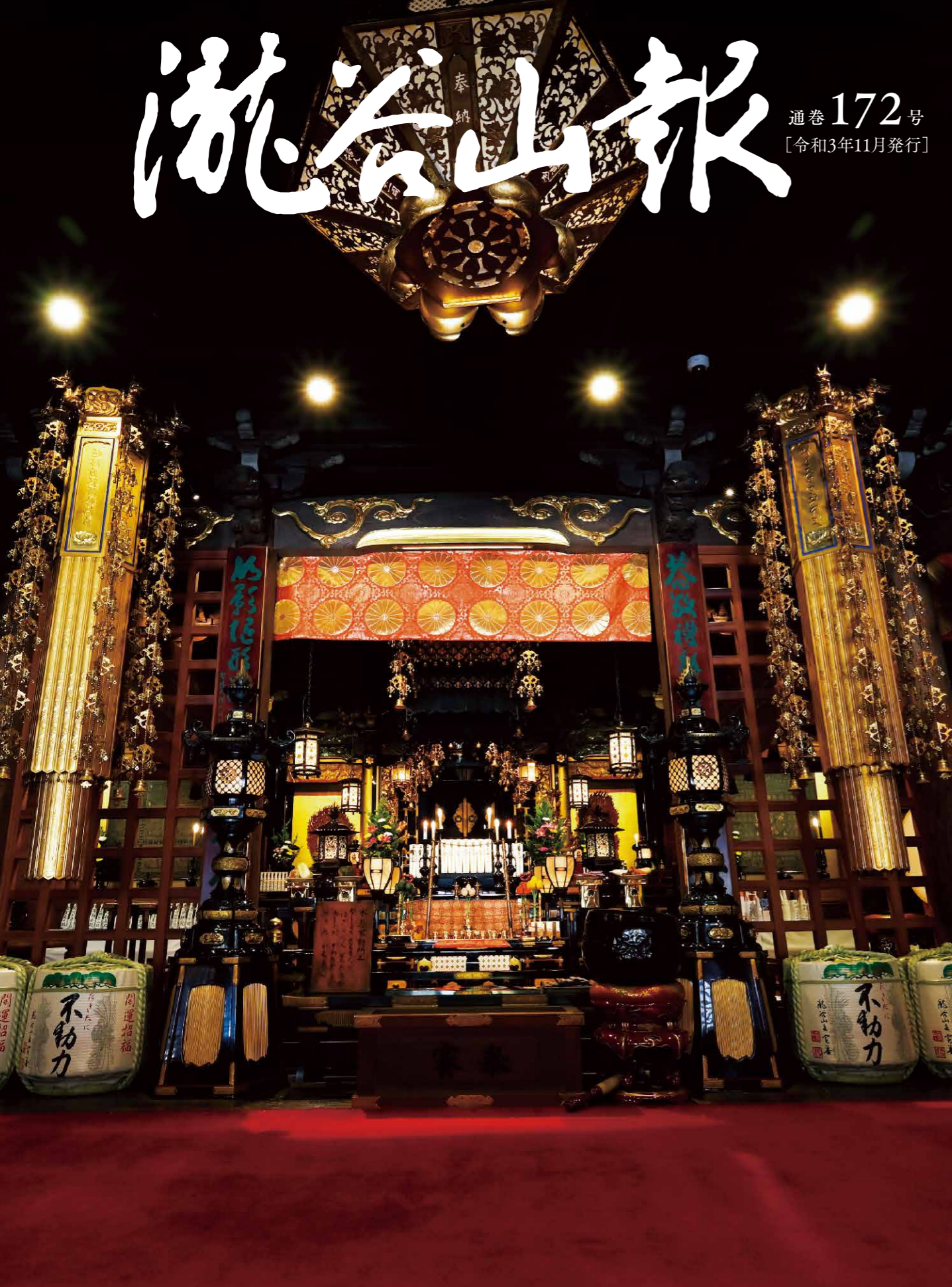


瀧谷山報

通巻 172号
[令和3年11月発行]



【今後の当山行事予定】

納め不動 12月28日

- 御本尊御開扉大護摩供【本堂】
〈午前〉6時・10時・11時30分
〈午後〉1時30分・3時



●滝不動堂護摩供

- 【滝不動堂】
午前9時頃～午後3時頃まで
(時刻は滝不動堂山伏に直接お尋ねください)



修正会 1月1日～1月7日 ※除夜の鐘・赤札守りの授与・新年よろこぶ茶お接待は休止しております。

- 御本尊開扉大護摩供【本堂】※混雑時は本堂への入堂制限を実施いたします(6頁参照)。

	午前						午後					
	0時	1時30分	7時	9時30分	10時	10時30分	11時30分	1時	1時30分	2時	3時	4時
1日	●	●	●	●		●	●	●		●	●	●
2日・3日			●	●		●	●	●		●	●	●
4日～7日			●		●		●		●		●	



●新春 交通安全祈願【明王殿】(5頁参照)

1日	午前0時～午前1時30分・午前7時～午後5時
2日～5日	午前7時～午後4時30分
6日・7日	午前9時～午後4時 <small>※場所が法楽殿(本堂横)となります。</small>



明王殿

●新春 滝不動堂護摩供【滝不動堂】

- 1日～3日 午前9時頃～午後3時頃まで(時刻は滝不動堂山伏に直接お尋ねください)

※行事予定は10月20日時点での予定です。今後、新型コロナウイルスの感染拡大等により変更する場合があります。詳しくは瀧谷山公式ホームページなどで随時ご案内いたしますので、ご確認ください。

■日々のお護摩祈禱

- 迎春期間…〈午前〉7時・10時・11時30分(2月15日まで) 〈午後〉1時30分・3時
- 毎月28日…〈午前〉6時・10時・11時30分 〈午後〉1時30分・3時
- お磨きの日…午前7時

(2月16日以降は平日午後のお護摩祈禱はございません)
迎春期間中、混雑時は本堂への入堂制限の実施を予定しております。

■交通安全祈願

午前9時より午後4時までの毎時0分・30分(30分毎)
(毎月28日および1月31日～2月4日は交通安全祈願はございません)

■お磨きの日のお知らせ

- 11月25日 ●12月25日 ●1月25日 ●2月25日
- この日は仏具磨きの日ですので、お護摩祈禱は午前7時だけです。

令和3年11月発行
通巻172号

- 発行所：瀧谷不動明王寺
〒584-0058 富田林市彼方1762 電話 0721-34-0028 振替 00930-5-17704
- 発行人：荒谷純光 ●編集人：荒谷純栄



得難き仏教(1)

ある時、一本の国際電話がかかってきた。電話の主はパキスタンのカラチに駐在し、現地責任者としてしばらくはここでの赴任になりそうだと告げた。日本とは異なるお国柄に戸惑いつつも、その国の文化や習慣に親しもうとする意気込みを電話越しに感じた。会話の最後に「パキスタンはかつてとても仏教が栄えたところです。仏像が初めて誕生したのもそこです。世界遺産にも登録されている場所もあるからぜひ訪ねてください」と助言した。

今は時間と資金と条件が整えさえすれば、地球上の相応な場所に自ら降り立つことが可能な時代である。とはいえ一生涯において他国の地を踏む経験には限度があり、今なお多くの人は生まれ育った国や地域で人生の大半を過ごし、そこで終焉を迎える。この生まれ育った環境というものは、私たちに多大な影響を及ぼしている。その環境とは与えられたものであり、とても受動的な条件である。そして誰も自分自身の意思でこれを大きく左右させることはできない。

「無上甚深微妙の法は 百千万劫にも遭い遇うこと難近にあらうが、これは貴重この上ない好条件といえる。ましてやご霊験あらたかなるご本尊とご縁を結んでいるとなれば、その果報ははかり知れない。このように仏法がしっかりと存続する場所の近くにいること、この「空間」の条件を整えることが二つ目の要件となる。

いかに最先端の技術等が進捗しようとも、この仏法に関わる時間と条件を満たさない限り、仏法はその人の内実に深く触れることは難しい。今を生きる人々にとって、あたたかな慈悲と智恵にあふれる生きた教えを有する仏教があるからこそ、人の心と世の中には正しく生きるための種が蒔かれるのであらう。

その後、再び国際電話があった。信頼する運転手と身辺警護を兼ねたガイドと共に世界遺産タキシラ遺跡を訪れ、ラホール博物館では高名な苦行釈迦像を拝し、想像を超える数々の至宝に接したと。仏教がこの国を大きく包んでいた事実の一端に触れた興奮と驚きを語ってくれた。

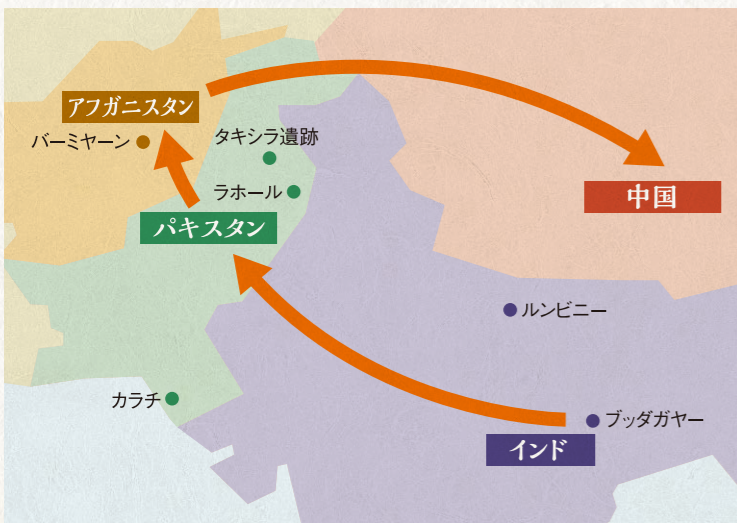
パキスタンにはかつて仏教の花が咲き誇った。だが今は咲いていない。そのまた西の隣国では凄惨な争いが絶

し」に始まる開経偈は決して至上の教えである仏教を殊更に誇張する表現ではなく、仏法に出遭うことが極めて困難であるという紛れもない事実を誠実に示した表現である。本稿ではそのことを確かめたい。

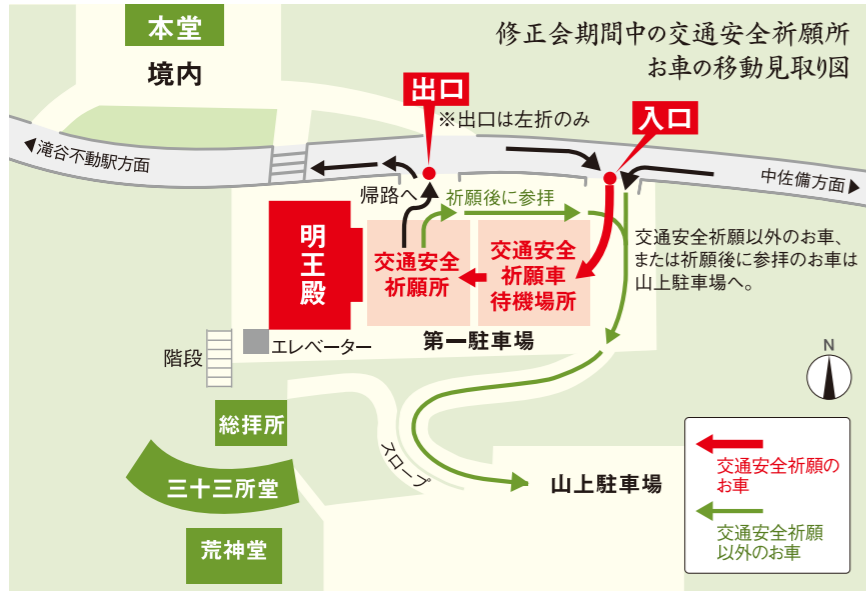
私たちは時間と空間の中で寿命という期間限定の命をいただいて生きている。宇宙の成り立ちや地球誕生からの時間に比較すれば、ほんの一瞬にも満たない刹那である。その一瞬の中で、仏教と邂逅できる条件こそ「仏前仏後の間に生まれる」と称される時間の条件。仏前とはお釈迦様ご出現以前の時代、仏後とは衆生済度のために今後出現される弥勒仏の時以降を指す。つまりお釈迦様の時代から弥勒仏までの時代、これを「二仏中間」という。仏法存続が約束されているこの時代に生を享ける、この時間の条件を整えることが一つ目である。

2021年の今も仏法存続の時代とは言え、仏法が確実に存続している場所の近くに暮らすことは重要な意味を持つ。仏法が存続する場とは、すなわち仏法僧の三寶が揃っているところである。大阪を始めとする近畿圏はえない。ここもまたかつて仏教が美しく国を彩っていたと伝わるが。

あらためて私たちが置かれている環境を見つめてみたい。三宝の近くにいることのありがたさに目覚め、日々の暮らしを充実させる思いを漲らせたい。本当の幸せとは、三寶具足の中からのみ生じるということを深く心に刻みながら歳末に向けた日々を過ごしたい。



仏教は紀元前5世紀ごろ北インドに生まれたお釈迦様によって説かれ、パキスタンやアフガニスタン、中国を経て1000年ほどかけて日本まで伝わった。この地域の仏教はその後、イスラム教徒の侵攻などにより13世紀までに滅んだ。



修正会期間中は交通安全祈願を明王殿で、当山所属の山伏出仕のもと盛大におつとめしております。

修正会期間中の交通安全祈願所・お車の移動経路は、左図の通りとなります。明王殿前の第一駐車場は、交通安全

新春交通安全祈願

全祈願のお車専用となります。交通安全祈願以外のお車は、山上駐車場をご利用ください。

納車時にご祈願を受けられた方も、改めてご祈願を申し込まれ、一年の交通安全をお祈りください。

- ご祈禱時刻：
12頁(裏表紙)に記載
- ご祈禱料：
1台4000円



修正会

令和4年元日～1月7日
御本尊開扉大護摩供 厳修

来たる令和4年、瀧谷山では元日から1月7日まで修正会をおつとめいたします。修正会では、年頭にあたり世界平和、五穀豊穰、萬民富楽を祈念し、併せてご参詣皆様のお願いを祈願いたします。

期間中は、秘仏ご本尊が開扉され、お護摩祈禱を普段より多く、また盛大におつとめしております。時刻は裏表紙に記載の表をご覧ください。また、お車で参りの方は、5頁記載の移動見取り図をご確認ください。

修正会はお不動さまとご縁を結ばれる特別な機会となります。家内安全・事業繁栄・厄除開運など、ご祈願を申し込まれ、新年を新たな心持ちでお迎えください。



- ご開扉期間：
1月1日～7日
 - お護摩祈禱時刻：
12頁(裏表紙)に記載
 - ご祈禱料：
5000円より
- ※大幅な混雑時には本堂への入堂制限を実施いたします。詳細は6頁に記載しております。
- ※本堂は伝統建築のため、冬季は冷え込みます。お参りの際は、暖かい服装でお越しください。

新春 滝不動堂護摩供



元日から1月3日まで、滝不動堂では山伏たちにより護摩供がつとめられます。

滝不動堂では護摩供で焚く護摩木のお供えを受け付けており、お供えされた数に応じて御幣が授与されます。

● 1月1日～3日

午前9時頃～午後3時頃

(詳細な時刻は滝不動堂山伏に直接お尋ねください)

● 護摩木：1本 3000円

※山伏による宝剣加持は休止しております。

聖酒「不動力」ご奉納のお願い



聖酒「不動力」
(題字も前住職による)

修正会期間中、本堂外陣正面に、皆様にご奉納いただいた聖酒をお供えいたします。

古来日本には、往く年の感謝と来る年の祈りを込めて、新年に神仏にお酒をお供えし、お下がりのお酒を飲むことでご利益をいただく習慣がありました。

瀧谷山でお供えする聖酒は、前住職の命名による「不動力」というお酒で、米と米麴のみで醸造された吟醸酒です。ご奉納いただいた不動力は、一本一本お名前を浄書してお不動様にお供えいたします。お供えされた方には、お下がりとして不動力一合瓶をお渡しいたします。

● 奉納料：1本 3000円

● 受付：寺務所もしくは

● 郵送 (新年護摩申込用紙裏面の通信欄に記入)

● お下がり：不動力一合瓶

(郵送申込の方には、後日寺務所で受領書と引き換えにお渡しいたします)

新年護摩のご案内

瀧谷山では修正会期間中、新年護摩と称しまして諸願成就を祈願するお預かり祈禱をおつとめしております。同封の用紙にご記入いただき、無病息災・家内安全・開運招福等、来たる年の吉祥を願ってお申し込みください。

護摩札は年内にご用意しますので、お申し込みは12月20日を締切とさせていただきます。なお、新年護摩のお札は修正会終了後の8日以降、事務所にてお渡しいたします。また、郵送をご希望の方には10日以降に順次お送りいたします。

● 祈願料：1体 1000円

(紙札でご用意いたします)

● 締切：12月20日



新年護摩札

新春の縁起物 幸先詣について

迎春期間中(2月15日まで)、令和四年新春の縁起物を授与しております。熊手・矢守等の縁起物や、竈の神さまである荒神さまのお札・家中を守護してください。お不動さまの護摩札など、縁起物を掛け替え、新しいお札に手を合わせると、新年を実感できるものです。どうぞ期間中にお受けください。

また昨年より、お正月の密を避ける観点から「幸先詣で」や「さきがけ参り」と称して新春のお参りを年内に済ませることが励行されているようです。瀧谷山では、年中お護摩祈禱をお勤めしており、新春の縁起物は11月28日より準備しておりますので、ご希望の方は年内にお参りください。

● 授与期間：11月28日～2月15日

● 主な縁起物：熊手・矢守・えとみくじ・護摩札・三宝荒神札等



新型コロナウイルス対策について

迎春期間中(1月1日～2月15日まで)、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、次の対策を実施いたします。

● 本堂への入堂制限(お護摩祈禱)
お護摩祈禱では、大幅な混雑時には本堂への入堂制限を実施いたします。

本堂への入堂はご祈禱申込のお施主ご本人様のみに限らせていただき、お連れ様は客殿大広間に待合所をご用意いたします。待合所には、ご祈禱の様子をモニターで中継いたしますので、分かれてご参拝いただくようお願いいたします。

なお、小さなお子様や介助の必要な方は、保護者・介助者お二人まで一緒に入堂いただけます。

● 手水舎・罌口・梵鐘の使用停止

● 修正会での除夜の鐘・赤札守りの授与・お年賀接待・新年よろこぶ茶接待の中止

● 滝不動堂での護摩木宝剣加持の休止
緊急事態宣言発出時の対応

修正会期間中に緊急事態宣言が発出された場合、授与品等の一部受付窓口を縮小いたします。お護摩祈禱・交通安全祈願・滝不動堂護摩供は記載通り行います。

◆秋季大祭(9月28日)ご報告

9月28日、瀧谷不動尊では秋の大祭法要がつとめられ、大般若転読法要が厳修されました。

今回は、政府の緊急事態宣言が直前に延長されたことにより、恒例の柴燈大護摩供が急遽中止となり、毎月賑わいを見せる露天商の出店も中止に。秋晴れの空とは対照的に、少し寂しい大祭となりました。

午前11時半よりの大般若転読法要も規模を縮小。通例、河内諸寺院ご住職にご出仕をいただくところ、当山職員のみにてつとめられました。

緊急事態宣言下ということもあり、お参りの方々も自ずから間隔をあけてお参りされているようでしたが、それでも皆一心に手を合わせられ、それぞれに所願成就をお祈りされていきました。

政府発表が直前となったため、先の171号では柴燈大護摩供中止の案内が間に合いませんでした。誠に申し訳ございませんでした。

お寺のごはん

6 塩こんぶ

菓子椀やおそうめんには椎茸のお出しを使いますが、その他は昆布出しです。お出しをとったあと、お昆布は冷蔵庫に保存しておきます。ある程度たまると塩こんぶにします。



材 料 ●お出しをとったあとの昆布 ●濃いくち醤油 ●お酒

- お昆布を色紙に切ります。(切ってから冷凍すると便利です)
- 濃いくち醤油とお酒を半々くらいで、お昆布がつかるくらい入れて火にかけます。お出しをとったあとのお昆布なのであまり弱火にすると柔らかくなりすぎます。
- ときどきまぜて焦げ付かないようお醤油の量を確認します。
- できあがる寸前は、すこし火を強くして、お昆布に艶をだします。お味が薄いようならここでお醤油を足してください。

作り方

季節によっては山椒の実を入れたり、時には細切りにしてみたりいろいろに楽しめます。お昆布と木の芽を一緒に炊いて、炊きあがったらまな板に取り出して細かく刻むと鞍馬煮のできあがりです。

炊いている時のお昆布の香りは格別です。ひよっとしたら一番好きな香りかも知れません。お砂糖を使わずに炊いた自家製の塩昆布は、お砂糖を入れたい分お醤油も控えることができるので、あっさりしています。

河内出身でないお坊さんが、このお昆布とお茶粥の味が忘れられず、自坊へ帰ってからも作ってもらっているという話はよく聞きます。

弘法大師〈第四 涅槃篇〉

当山の開基と伝えられる弘法大師空海さま。そのご生涯を発心・修行・菩提・涅槃の四篇に分けて簡単にご紹介するコーナーです。今回は最後の涅槃篇です。

「涅槃」とは、古代インドの「ニルヴァーナ」という言葉をもとに、その響きを漢字に置き換えたもので、「吹き消された状態」を意味します。何を消すのか、それは「煩惱の火」であると言われています。涅槃とは、燃え盛る煩惱の火が滅し尽くされた、静かなさとの状態をさします。

それと対極にあるのが、煩惱にとらわれ、生まれては死にを繰り返す私たちの姿です。これを仏教用語では生死輪廻といいますが、涅槃とはまさしくその生死輪廻から自由になっている状態をいいます。

第一回の発心篇にて見てまいりましたが、若き日の弘法大師はこの生死輪廻を超え、そこから自由になることを目指し、仏道を志されたのでした。

四回にわたってお送りしてきました弘法大師のご生涯ですが、今回で最終回です。紹介しきれなかった業績がたくさんありますが、いよいよ最晩年に入っています。

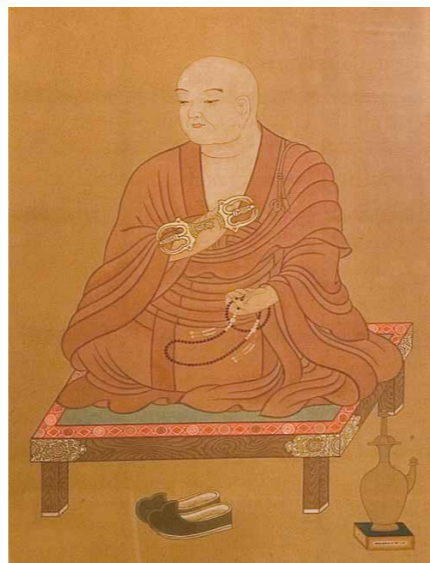
教えの精髓

弘仁十四年(西暦八二三年)、弘法大師の理解者であり、支援者でもあった嵯峨天皇に代わり、淳和天皇が即位します。淳和天皇は国内の仏教宗派に対し、それぞれが持つ教義を概説して朝廷に提出するよう命じます。弘法大師はこの命に応えて天長七年(西暦八三〇年)、『秘密曼荼羅十住心論』『秘蔵宝鑰』を著します。

これらの著作において弘法大師は、当時のさまざまな宗教・哲学・仏教宗派の考え方を網羅的に解釈しています。そして、それらの中で「生死輪廻を超える」という目的に最も適うものが真言密教の教えであると説き、それゆえに生死輪廻から自由になることを願う者は、ぜひとも真言密教の教えを選びとるべきなのだ、と示したのです。そこで弘法大師のもたらした特筆すべき教えが「即身成仏思想」でした。

仏道修行の最終目標は生死輪廻を超え、さとりを得ることです。それはとりもなおさず、仏教の開祖であるお釈迦様が菩提樹の下でひらかれたさとりを、自らも追体験しようとするところでもあります。しかしそれは非常に難しいことであり、仏さまと同等のさとりを得ることができないのは、限られた素質のある人だけでした。たとえば「菩薩」と呼ばれる方たちは後に仏となる特別な人のこと。

時代が下り、志すならば誰もが「菩



薩」として、仏さまと同じくさとりを開くことができるかと考えられるようになり、また。しかしながら、その実現には「三劫」という時間がかかることとされてきました。「三劫」とは、ほとんど無限ともいえる途方もない時間のこと。一説に「とてつもなく巨大な岩を、ふわふわの天女の羽衣で百年に一度だけ撫で、それを繰り返して岩がすり減って消滅するまで」などと喩えられます。これほど長い間、さとりを得られるまでずっと生まれ変わり、死に変わりを繰り返す、修行を続けるのです。

これに対して弘法大師が唐よりもたらした密教では、このような途方もない、無限の時間を経ることなく、速やかに成仏できる、という特質が付加されました。密教独自の修行によって、今生のうちにとることができると説いているのです。これをして即身成仏と名づけました。

万灯会のねがい

さて唐からの帰国以来、弘法大師はこの国で真言密教を学ぶ道場の建立に心血を注いできました。中でも特筆すべきは高野山の開創であったといえましょう。天長九年（西暦八三二年）、弘法大師は高野山の地で万灯会を修します。万灯会とは、その名の通り一万もの灯明をともし、仏さまにささげる法会で、罪を懺悔し、罪による障りが消滅するようお祈りするものです。この法会を営むにあたり、弘法大師は一首の願文をしたためました。万灯会を営む理由を、大師は次のように述べています。

煩惱になやまされ、貪りや物惜しみ、よこしまな心を抱える我々。この暗闇に迷うが如き根源的な無知こそが生死輪廻の原因である。これに対し、すべてを明らかに照らすさとり智慧は寂靜なる涅槃の根本である。その智慧は曇りなき鏡のように我々の心を照らし、あらゆる障りを除く。

ここに空海、万の灯明と万の華とをささげ、一切の諸仏を供養したてまつる。願わくはこの清らかな光があらゆる生きとし生けるものへと届き、無知の暗闇を除いて智慧の華を開かんことを。

や、明治期の廃仏毀釈によって中断されながらも、令和の世まで伝えられ、今は東寺に場所を移してつとめられています。真言密教において最も厳かな儀式です。御修法をつとめ終え、春を迎えた三月、弘法大師は、高野山の地において人々の平安を祈る禪定に入るため、弟子たちの前から姿を消されました。そして今なお、高野山奥の院に留まって、生きとし生けるもののため、深い祈りに住しておられるのだと信仰されています。

諡号と入定留身

時は流れ、およそ七十年後。弘法大師が日本にもたらした真言密教は、しっかりと日本に根付いて、多くの人々の心のよりどころとなりました。この頃、高位の人々の中にも真言密教での修行を志す人があらわれ、とりわけ宇多天皇は讓位の後、真言密教の修行のために出家され、初めて「法皇」の称号を名乗られた人となりました。

このような中、時の金剛峯寺座主であった観賢僧正が朝廷に対し、数年にわたって申し入れたことにより、空海さまの遺徳を讃えるために朝廷から諡号がおくられました。諡号とは、貴人や高僧に対し、亡くなられた後、その功績を称えておくる名のことです。それが、まさに「弘法大師」の諡号でした。

この願文からしばしば抜き出される奥深い一節があります。

「虚空尽き、衆生尽き、涅槃尽きなば、我が願いも尽きなん」

無限の宇宙が消えてなくなるまで生きとし生けるものがみな涅槃に入り、輪廻の苦しみから自由になるまで、私の願いは尽きることがない。その時まで、尽きることなく祈り続けるのである、と。尽きることなく、祈り続けるのであれば、この高野山ははるか高くそびえ、絶えることなく仏法の光明を放ち続けるであろうと、弘法大師がこのように誓われて、実に一千二百年の歳月が流れました。そして大師がささげた灯明は今なお、人々が日々ともす灯明の光の中に受け継がれています。

御修法と御入定

承和元年（西暦八三四年）、弘法大師は宮中に真言院という道場を設け、ここで正月に「後七日御修法」を行いたい旨を朝廷に願ひ出します。宮中では、古来正月の元旦より七日間にわたり神事がつとめられており、「御修法」はそれを終えて後、次の七日間である八日より十四日まで、国家安泰・国土安穩・五穀豊穰等を願うための儀式です。

「弘法」とは世に仏法を弘めたことを意味し、「大師」とは多くの功績を残した高僧に対する尊称です。振り返れば、弘法大師は唐へ留学して運命の師・惠果和尚と出会い、「日本に広く密教を弘めよ」との遺言を託されてよりは、まさしくそれに応えるご生涯を送られました。まさにそのご生涯に相応しい諡号と言うべきでしょう。

この諡号を賜ったことを、大師のおられる高野山奥の院に報告に上がった観賢僧正は、その時、生きてその身を留め、祈り続けられる弘法大師の姿を目の当たりにしたと伝えられています。

これまで、令和三年の当山開創一千二百年にちなみ、当山の開基と伝えられる弘法大師空海さまのご生涯を四回にわたって振り返りました。

瀧谷のお不動さまを刻まれた弘法大師が禪定に入られてより、ほぼ一千二百年の月日が経ちました。その間ずっと人々のために祈り続けてこられた弘法大師のそばには、きつとお不動さまがいっしょにしゃることでしょう。そしてこれからも、お大師さまはお不動さまとともに、人々のために祈り続けられ、そして時には不思議なご利益を顕され、私たちを救い導いてくださるに違いありません。

実は、万灯会の前年である天長八年（西暦八三一年）に、弘法大師は病を得、体調を崩していました。この頃、にわか自らの肉体的な衰えを自覚し、「まだやるべきことがある！」と高野山や宮中での重要な法会を願ひ出たものと考えられています。

まもなく朝廷より御修法の許可が下され、明るる承和二年（西暦八三五年）正月、宮中にてこの後七日御修法をとり行います。以後、毎年恒例となり、室町期の戦乱



～ 編集後記 ～

今年も年末が近づいてきました。これを書いているのはまだ10月とはいえ、歳末号を編集していると、慌ただしい年の瀬が迫ってきたように感じ、心が落ち着きません。季節が突然移り変わるかのように、政府は駆け足でコロナ禍以前の生活に戻そうとしています。なかなか心が付いていかないというのが正直なところではないでしょうか。

4回に分けて掲載してきた弘法大師のご生涯も、なんとか今年中に最後まで掲載できました。原稿は早くにいただいたのですが、編集に手間取り危うく年が明けるところでした。今年の山報は弘法大師と、お寺のごはんに助けられました。この場を借りてお礼申し上げます。

開創一千二百年の年が終わり、新たな百年が始まります。瀧谷山報もいっそう良いものが発行できるよう、精進いたします。